

映画秘宝について（私信＝非公開書簡）

岡本敦史さま
ギンティ小林さま
小沢涼子さま
奈良夏子さま
市川祐太郎（力夫）さま

2021年12月4日（金）
サイバーダイネ株式会社
代表取締役 高橋信之
<http://www.cyberdyne.co.jp>
takahashi01@cyberdyne.co.jp

前略

各位、5名様への連名・BCC同報にて失礼します。

このたび、映画秘宝第七代編集長を拝命した高橋信之です。

小沢さんとは竹書房時代に『河崎実大全』の取材で、ギンティさんとは小峯隆生・町山智浩との紹介でお会いしていますね。小林さんの拳銃イラスト画集で我が社の会議室を臨時編集室として貸したり、ばったり明大前の駅で会ったり。（覚えていますか？クリスマスイブの夜でした、確か）

岡本さん、奈良さん、市川さんとは面識がないと思います。はじめまして。

さて今回の騒動で、ひょっこり私（以下、タカハシ）が現れて編集を継承すると宣言したこと、皆さんは多少、驚かれたでしょうか？ タカハシもそういう顛末になるとは先月まで思ってもいませんでした。

今回の不始末、ちょっと看過できずにやむなく「メガフォース」が出動した次第です。

この流れをお知らせしておかないといろいろと禍根を残すなあ…という判断と、皆さんの戦い方があまりにアマチュア、まるで「レッドドーン」なので見ていられなくて本状をしたためました。

（レジスタンス、ゲリラの戦い方としては、あまりに稚拙です。コーチしましょうか？）

この文書は、映画秘宝第七代編集長就任前、まだ正式には部外者、私人としての差し出しです。

12月21日売りの2月号までは岡本さんが編集長として編集制作をされており、次の号からタカハシがバトンタッチをされる…とオフィス秘宝：田野辺さんと取り決めました。

そして、ここからが重要なことなのですが、この私信は皆さんの他は映画秘宝内部関係者のみの限定公開（非公開書簡）とタカハシは考えています。こちらから映画秘宝本誌、公式サイト、双葉社の販売告知サイト、タカハシのFacebookなどで公開することはしません。

みなさんが「こんな私信をタカハシから貰ったよ。パワハラだよね～」と公開することは自由です。

（みなさんがパワハラがなんであるのかを御存知かどうかは、ともかく）

もちろん第三者への転送もタカハシからは禁じません。

ただし、その際は皆さんが公開、転送されたものとタカハシが送ったもの（本状）とが完全に同じものであるかどうかを問うために、こちらで改訂／改竄なしに公開します。

（プリントアウトした本状は、メール送付日に公証人役場で日付証明を取得します）

■公開公知とはなんであるのか…？

なぜこのようなところから皆さんに解かなければならないかというと、皆さんが一般常識や法律知識においてあまりに知識がないからです。今回の「業務請負の終了宣言」についての発信が、あまりに稚拙だからです。

ちなみに皆さんは「退職」と表現することで、あたかもオフィス秘宝と雇用関係にある被雇用者＝労働者のように自らを名乗っていますが、本質はページ毎の編集や執筆を請負している自営業者ですよね。

オフィス秘宝を雇い主として社会保険にも雇用労災保険にも加入していないし、タイムカード打刻もなく裁量労働の取り決めもされていませんよね。個々の出勤も定めなく、映画秘宝誌以外の仕事も自由に行えるフリーランサーのお立場です。

映画秘宝編集部の記者名刺をもち、洋泉社発行元からすでに何年ものキャリアを映画秘宝で積んできた方は実質的な被雇用者・労働者であるとして洋泉社やオフィス秘宝社に入社することも可能でした。

また小沢さんと奈良さんは洋泉社時代には社員編集部員として、その後はフリーランスとして活動中とお聞きしました。でも皆さんはオフィス秘宝社への社員としての雇用は望まれてこなかった。

それは映画秘宝以外の仕事があるからなのか、社員としての拘束を望まなかったのかですよね。

たとえば小説家や漫画家が連載を終了することは雑誌編集部から退職とは言いませんよね。

ながらく活動の基盤としていた映画秘宝誌の編集部員としての自覚から「退職」という表現を使いたかった皆さんのお気持ちは分かりますが、それだけ愛着があった雑誌に、この仕打ちはないですね。

(ちなみに：終わり)

今回、皆さんは大きな錯誤によるミスをしています。

- 1) たとえ「私信」と書いても法人が所有するメールアドレスから発信されれば、公知。
- 2) 公知状態で自ら公開した情報はどこまで広がっても止められない。
- 3) それでも私信だと主張すれば、法人所有のアドレスの私的利用と占有が問われる。
- 4) 誰に出したか記録がないとなると私信の漏洩は誰からかも分からず責められない。

タカハシのところにも、複数の関係者から「こんなメールが流れてるよ」とアラートがありました。そこから抜粋して、この本状を送らせて頂きます。(以下、公知の情報と認識しています)

岡本敦史	090-		. ne. jp
ギンティ小林	080-		. com
小沢涼子	090-		. com
奈良夏子	090-		. co. jp
市川祐太郎（力夫）	090-		. com

そもそも、これらビジネス上で公開されたデータは保護されるべき個人情報とは認定されません。通常の業務で名刺やメールに記されて公開されている情報だからです。

■皆さんの「敵」は誰…？ 「目的」はなに…？

今回の皆さんからの心ない「業務請負の終了告知」により、タカハシとチームメイトが進めていた映画秘宝誌の継続刊行や発展に対しての支援先探しには少なからずダメージが発生しています。

やむなく対抗せざるを得ずに発表したタカハシからの「新編集長あいさつ」もまた、予想外によい反応が出ていて新しいミカタは続々と増えています。すでに御祝儀広告の申し出も数件ありました。

いまへたっている映画秘宝誌についておけば「義勇の徒」となれる。

タカハシが編集を仕切ればオモンロイ展開があるかも…という期待感をもって来ています。

さて今回の皆さんの離脱はなにを狙ったものであるのか、タカハシにはまったく理解できません。

戦争に負けて撤退するから街に火を放て…という「パリは燃えているか」状態としか思えません。

ヒトラーの無茶苦茶な命令を無視したドイツの占領軍司令官のおかげで貴重な建築物や文化財そしてパリ市民の生活は守られたわけですが。(DVD、出てますよ)

みなさんは誰を敵と認定しているのですか？

だれか気に入らない敵がいるから困らせてやろう…とこのような破壊活動をしているのですか？

(もしそういう意図無くやっていたとしたら、それはそれでサイコパスですよ。怖い…)

A) 合同会社オフィス秘宝は「敵」ですか？

今回の皆さんの業務請負の降板で一番困るのは、オフィス秘宝社です。

双葉社との2年間の刊行契約が履行出来なくなれば、ペナルティもあり得ます。

そうでなくても脆弱な財務基盤の同社は経営が立ち行かなくなるかもしれません。

まだ皆さんがオフィス秘宝社から受け取っていない報酬は2号分はあると思います。

ざっと500万円位は未収となっていないませんか？ 取りっぱぐれも覚悟されてますか？

B) 田野辺尚人さんは「敵」ですか？

オフィス秘宝社と田野辺さんは同体ですよ。

岩田さんが抜けて、オフィス秘宝社は田野辺さんひとりとなっています。

(経理のパート、弁護士、アドバイザーなど外部に非常勤のお手伝いはいますが)

タカハシは田野辺さんとは今年2021年になってからお会いしました。

二十数年振りくらいだと思いますが、お身体を悪くされ杖をつかれての歩行に驚きました。

このような心労こそ治療中の方にはよろしくないとは思いませんか。

いまTwitterでは「オフィス秘宝が悪、抜けた五人は正義」といった内情を知らない無責任なコメントも散見されます。あそこは表層的な短語(数十文字)ですべてを知ったかのように語る浅薄な輩が多くいるので仕方ないと思います。

もし彼らが「病人ひとりを残して健康かつ稼げる五人がいち早く脱出」と知ったら、彼らの意識はがらりと変わりますよね。

タカハシが今回の義勇行動を決心した大きな理由は、ここに 있습니다。

C) 双葉社は「敵」ですか？

洋泉社の吸収合併、映画秘宝の廃刊を決めた宝島社から自ら独立、退職してでも「なんとか刊行を続けたい」という岩田、田野辺の思いによりオフィス秘宝が設立され、双葉社は、その窮状を知って刊行を続けられるように手配してくれた奇様な版元さんですよ。（会社の風土として性格の良い版元さんです）

今回のDM被害者の対応では明らかに巻き添えを食っています。

和解成立をめざして双葉社は協議を続けています。オフィス秘宝の和解は成立しており、その発表の形式とタイミングを計っていたのに。

「ちっとも謝罪しようとしなさい」というように皆さんはオフィス秘宝と双葉社を責めていますが、「謝罪は終わっており、公表をいつするか」というのが事実です。そして困ったことに、その事実を皆さんは知っていたにも関わらず「謝罪しない企業」というように事実を曲げてイメージの誘導をしています。

そこまでやってしまったら、大変な不義理になる…とは思いませんか？

決死の覚悟でオフィス秘宝社を設立した岩田・田野辺そして設立の資金を数百万円の貸し付けで拠出した町山、その覚悟を汲んで刊行を引き受けてくれた双葉社のおかげで映画秘宝は再創刊できたのです。

通常であれば、この手の刊行では、オフィス秘宝が発行元、双葉社が発売元としてコード貸し（雑誌コードをリースする）で行うのが出版界の常識です。ところがそうするとオフィス秘宝社は売上に応じた配分収益となり部数の上下で収入が不安定になります。また印刷所への支払も負うことになります。

これではなにかあったときに厳しいだろう…という双葉社の配慮で、双葉社が刊行元となり毎月の制作費を固定金額で支払うかたちでリスク低減をしてくれているのです。その金額も月刊100ページ、2万部印刷という小規模サイズの雑誌では十分な金額です。おそらく版元としての利益は出ていません。

（にも関わらず双葉社が映画秘宝を支援した理由のタカハシ推測は後ほど）

皆さんがいま受け取っている報酬、ひとりあたり50万円近い金員はこういうリスクから支払われているということは当然御存知のはず。

にも関わらず、刊行元の双葉社の発行人・編集人（名義人）・法務担当者などにまったく前相談も事前通知もなく、そしてオフィス秘宝にも通知なく、皆さんは「業務請負の終了」を「退職」と説明し、あたかも映画秘宝誌は、もう出ませんと言わんばかりの宣言をされています。

そこまで双葉社が皆さんから「敵」認定をされている理由が理解できずに困惑します。

皆さんが「敵とは思っていないし、そんな迷惑もかけてないから」と思われているのなら、恐ろしいです。

ヒトの足を踏んでおいて謝罪もなく「悪意はないから」という姿勢は皆さんの常識ですか？

一向に謝罪しようとしなさい（事実には反しますが）という理由で脱出宣言をしておいて、それで迷惑をかける相手先の筆頭である刊行元にはなんの謝罪もない…というのでは、もうこれは「迷惑をかけても謝らない病」だとは思えません。どこから感染したのかな？

おそらく皆さんが映画業界・出版業界に向けて出した脱出宣言は「これからの自分らの仕事に絡んでくるヒト達」向けのものだと推測します。沈み行く船から逃げ出す時に自分らの正当性を主張しないと、次の展開が難しくなりますからね。

D) 取次や書店は「敵」ですか？

今回の脱出騒動で迷惑をかけるのは、取次や書店でもあります。

皆さんが振りかざした正義（？）に誘導されて読者が減れば、当然ながら売上減となります。

直接的にはひとつの書店で数冊レベルかもしれませんが、雑誌の効能は「書店に足を運んで貰うきっかけ」として期待されているという商業的誘導因子としての効果もあります。

映画秘宝読者が書店に足を運び、ついでに映画書籍を購入してくれる率が高いからです。

まあ岡本編集長としての最終号2月号（12月21日売り）は出せたとして、次の号が出せないとなったら、大変なことですよ。双葉社も状況が分からず、取次も書店にも連絡が行かないまま配本されてこないとなったらどれだけのヒトがお詫びしなきゃならないのか…。

自らが関わる「謝罪の行く末の不備」を降板の理由にする皆さんが、さらに多くのヒトに別の謝罪をさせる感染源となるとは…。皆さんが「自分らの正義（？）を通すため」「自分らが思い通りならないなら」、パリも江戸も焦土と化しても関係ない…というサイコパス形質とは思いませんが。

ひとつ心配なのは、小沢さんが前職の竹書房の編集者時代に手掛けた『河崎実大全』のことです。

ちっとも売れなかった業績結果に対して「辞める前に竹書房にダメージを残して行こうと思って」という発言を各所でしていたことがタカハシの耳に入っています。驚きました。

編集者として「売れない本を作ったことを恥じるでもなくうそぶく」とは。

売れないと分かっているのに取り組んだ確信犯だとしたら、それは監督本人にはとても失礼なことではありませんか？ マニアックな本でも編集者の知恵で売れる本にするのがプロの仕事です。

竹書房の取締役・部長もタカハシの早大漫研つながりで知り合いが数名いて、この報復のための出版については裏取りもしました。そういう愉快犯形質だということは竹書房も後から気がついたようです。

そんなことを続けていたら出版業界で相手するヒトはいなくなりますよ。すでに竹書房は出禁でしょ。

E) DMの被害者は、皆さんの「敵」ですか？

このタイミングで皆さんの声明文が出ることはDM被害者としては驚きでしかないですね。

すでにオフィス秘宝社とは謝罪合意が成立し、双葉社もまた合意を結ぶところです。

（合同会社オフィス秘宝の顧問弁護士から和解内容を確認しました）

両社はDM被害者と「公表の仕方とタイミング」を計っていたところなのに、皆さんから「謝罪しようとしないうちにオフィス秘宝と双葉社」というかなりねじ曲げた降板理由の発表。

これで映画秘宝誌が早期の休刊となってもそれはDM被害者にとって「勝利のトロフィー」にはなりませんよね。自らが受けた被害を伝えて謝罪と再発防止を求めただけなのに、編集部内部の歪んだ人間関係の暗闘に利用されたと思われるのではないのでしょうか。

皆さんの行為は決して、DM被害者のためにはなっていないと思います。

DM被害者のために…という御旗を掲げられても迷惑なんじゃないですか？

それとも敵認定している相手だから、気にされてないのですか？

■タカハシ（メガフォース）出動の経緯

皆さんの「脱出宣言」作戦に対して、想定外の登場を余儀なくされたタカハシです。

12月売りで自分らが降板すれば、その後、1月・2月・3月売りの3号分は誰も編集進行できずに契約（2年間：24冊）をまっとうできずに早期の休刊になるだろうと踏んだ皆さんの思惑は少し変わると

思います。

よしんば終わったとしても、岡本編集長は「最後に役職を放り出して雑誌を休刊された編集長」という不名誉な肩書きで終わることになります。

まあ、こんなことは出版業界では決して珍しくないんですけどね。

過去、タカハシは東京ニュース通信社TVガイド誌から数十名規模でスタッフが引き抜かれての角川書店／プロダクション北斗での週刊ザ・テレビジョン誌の創刊も、角川メディアオフィス：マル勝グループからの八十名全員退職からのメディアワークス：電撃グループ創刊にも遭遇しています。

というか完全な無人オフィスに社員・知り合いを30数名送り込んでマル勝スーパーファミコン誌など4誌の継続を支援したのは、タカハシでした。

佐藤辰男さんが書かれた『KADOKAWAメディアミックス全史』の反対側にいたんですね。

ただし引継ぎなしでの降板は、雑誌のバイオリズムに著しく悪影響となるため最悪、休刊もあり得るし、過去にはそういう焦土作戦も計画されました。

メディアワークスの場合、数奇な運命でまた違った展開になったんですが。

（これは近々刊行するレポートブック『その時、角川歴彦の手は震えていた』で著述します）

今回の皆さんの降板告知については、田野辺さんから双葉社へ、同時にタカハシへ知らされました。

11月発売号の後のことです。

フリーランスの皆さんが降板されることも、引継ぎについてなんら責任もないことも充分理解しているタカハシとしては、最悪、なんらの引継ぎがなくてもなんとか3月売りまでの刊行が行えるようにスタッフの編成を考え始めました。

どこで岡本編集長とお会いして「平和裏な業務請負の移行」を行うか…を探っていたところで、皆さんからの突如の「降板宣言」メールが出ました。12月1日のことですね。

次の体制が発表されないと「映画秘宝オワコン」イメージが業界に広まるな…と考えて、やむなく「第七代目映画秘宝編集長就任」をすぐさま同日にFacebookで告知した次第です。

双葉社での刊行分の残り3号分の編集長、その後の新体制での編集長を誰にするか…は12月1日までは未定だったのです。候補リストは作成中で、引き留めたいと思う岡本さんのお名前もありました。

ほんと、バッドタイミング。

■映画秘宝へのアクセス経緯

町山くんがJICC出版局（現・宝島社）にて学生ながら別冊宝島『ゴジラ宣言』で数度の重版増刷を成し遂げたことで就職採用につながった経緯を皆さんが御存知かどうか分かりませんが、それを紹介したのはタカハシでした。その縁もあり『ゴジラ宣言』『このビデオを見ろ』などに投稿しています。

タカハシが寄稿していた『ロードショー』誌、『キネマ旬報』誌にも、光山昌男のマウントライトにも、ケーブルホークにも紹介しています。早大漫研の後輩で出色の編集者でした。

ただし町山くんからは少々煙たい先輩であったと思います。

それは仕事上の誤解誤謬の指摘とかうるさい先輩という役割ではなく、学生時代の恋愛と事故、社会人になってからの宝島社時代の大暴れの脇にタカハシがいたからです。

いろいろカッコ悪いところもたくさん知ってるから。

なので、今回のレスキュー作戦について、町山くんからの一切の依頼請願はありません。

タカハシが町山くんに特別に厚意をもつ理由もありません。

あくまでも映画秘宝という希有な媒体を消滅させるのはもったいないという出版ビジネス上の思いと、困っているヒトを少しでも手伝えればという義勇からの動きです。

タカハシが映画秘宝に興味をもったきっかけは別冊映画秘宝の企画提案でした。

例えば

『ナチ映画ベスト&ワースト100』を米国：サイモンヴィーゼンタールセンター監修で、
『カッコいいタバコの吸い方 男と女の健康問題』をJTと電子タバコメーカーの協力で、
『隠れたキーアイテム：時計 プロダクトプレイスメントの秘密』を世界最大の映画広告代理店監修で、
という別冊の提案をしたかったのです。

洋泉社時代にも元気な頃の石井社長にはお話したことがあったんですが、いろいろとタイミングが悪くて企画持ちこみにはなりません。石井さんとは別冊宝島での、そして洋泉社は旧・現代新社の頃、飯田橋で写植版下バイトをしていた頃からのつきあいでした。

その後、双葉社での刊行体制となりタカハシとしては再びの接近遭遇となりました。

双葉社はそもそもタカハシが初めて創業した会社、有限会社スタジオ・ハードの設立のきっかけとなった版元さんです。21歳の頃、学生ライター時代に持ち込んだ企画『カリオストロの城』ムックがたちまち累計20万部を超えるヒットとなり、その編集印税でハードを作ったのでした。

その後、『ルパン三世』『ドラゴンクエスト』『スーパーマリオ』のゲームブックシリーズも持ち込んで、累計1000万部を超える実績を出しました。過去の栄光ですが2年連続で双葉社が印税支払いしてる取引先の首位にいました。赤川次郎さんとかを押さえて。

今の編集局の取締役2名も社長も、亡くなった前社長・会長、取締役や担当など多くのヒトと仕事をしている…いわば、双葉社はタカハシにとって出版業界での古巣です。

お、改めて映画秘宝別冊の企画も提案に行こう！

2020年夏頃に別件で取締役室に顔を出した時、オフィス秘宝へのコンタクト開始を告げました。サメ映画の本も出したかったのだ。

その後、コロナ禍がとんでもないことになり、タイミングを失ったまま、年明け。

そして、あの信じられない事件。

なかなかタイミングを見つけられないまま、1年以上が過ぎました。

その間、改めて映画秘宝を取り巻く映画ジャーナリズム、映画レビューメディアを見ると映画秘宝誌がなかなか「時代に取り残されている」感が強いと思うに至りました。

公式Webサイト：eigahiho.jp は閉鎖中、Twitter 公式の投稿は頻度と広がり不足、Youtube 動画も非公式なファン投稿しか見当たりません。

今の時代、これはあかんと思いました。

そこで「別冊映画秘宝の御提案」と「Web デジタル化の御提案」というふたつを、本誌の部数落ち込み回復支援策として、再出発のタイミングで提案しようと思ったのです。

もちろんそれはDM被害者の件の解決後のアクションです。

ところがDM被害者の方も不慣れがめだち、ダメな弁護士への依頼や解任、また勘違いで投稿されるそそかしい方のようにいろいろと回りが見えておらず、随分と謝罪合意まで長引いてしまいましたね。

映画秘宝別冊、Web 秘宝デジタル。

そこには本誌と同様のエネルギーが必要であり、資金投入が不可欠です。

それをオフィス秘宝、双葉社に求めるのは厳しい状況だと判断しました。

DM被害者の対応遅延、仕損じた謝罪、その謝罪がパワハラでやられたものという内部告発。

ベテラン勢の追放や降板。そういう不和は読者にも伝わり部数減にもつながったと思います。

それらが収まるのを期待しつつ、タカハシは複数のパートナーと「新体制のための資金調達」についての企画書を作成していました。皆さんが進行される月刊本誌の支援になる企画、オフィス秘宝の資金余力となる企画を念頭に置きました。

皆さんの本誌の仕事を横取りしようなどとは全く考えていません。

印税や成功報酬が発生しない・させにくい雑誌の仕事よりも、書籍単行本扱いで出せる別冊の方がずっとヒットした時の利益が見込めるからです。また編著者として権利も確保できます。

Web デジタル化も電子書籍、配信チャンネルの持ち方によっては新しい収益が見込めると思います。

もちろん、どちらも本誌の皆さんの余力があれば、みんなでやれると思っていました。

■なぜタカハシの作戦が皆さんに開示されなかったのか？ 湧き上がる疑念

- ・双葉社との刊行引き受け契約2年が2022年3月売りの5月号でひと区切りとなること。
- ・別冊刊行やWeb デジタル化については別の予算を確保しなければ実現できないこと。
- ・双葉社での継続刊行か、他社または自社（オフィス秘宝）での継続刊行かの選択時期が来ること。
- ・他社での継続刊行となると、さらに引受先版元も探さないとならないこと。

という現状を踏まえて、田野辺さんと我々は幾つかの懸念材料を想定しました。

▼編集部の皆さんがタカハシにアレルギー、ストレスを感じるかも知れないこと。

- ・先の「パワハラ謝罪」で皆さんが追い出した町山智浩の大学漫研と業界での先輩であること。
実際にはコンタクトは皆無で、今回の件でもTwitter でDMしてますが無反応です。

いろいろと煙たい先輩なのですなおには「助けて」とは言えないんでしょうねえ。
でも皆さんからすると「町山側の反撃」と受け取られかねないかなと。

- ・本誌の仕事を奪いに來たのではと警戒されるかもしれないこと。
謝罪文パワハラ事件で追い出したベテラン勢たちの分も皆さんが執筆するようになり報酬対価も増大。
ひとりあたり月に30万円超～50万円近くの収入と、1年前よりもかなりの増額となっていますね。
それを再び奪われるのでは…という懸念を持たれるかもしれないことが予測されました。
(前述しましたが、タカハシがやりたかったのは利益率と著作権が持てる別冊・単行本なんです)

そこで拒絶反応が出ては良くないということで、本件のタカハシ作戦は皆さんへの情報開示は先延ばしにすることにしました。

「確たるスポンサーが見つかった場合」かつ「双葉社が刊行継続を断念した場合」には皆さんにお知らせして、「次のステップに共に進みましょう」と告げればよいとの判断でした。

逆に妙な懸念を抱かれて「謝罪文パワハラ事件」のような実際には存在しない事件が仕上がってしまったのは新しい支援者はドン引きします。

もうひとつ皆さんに対してのタカハシ懸念も大きな影を投げかけていました。

▼編集部（皆さん）は、ログ化しているのではないか…？

統治力の弱まった国、地方、会社でその構成員が自分らの思惑や欲望を解放してログ（ならずもの）となる例は多々あります。アフリカの小国でのいざこざについては『ホテルルワンダ』『ブラッドダイヤモンド』を観るといいと思います。タカハシが感じた皆さんへのログ化懸念の顕在例を書きます。

1) 追い出したベテランの分の仕事を奪って、ウハウハ？

前述しましたが、奈良さんの謝罪文パワハラ告発で映画秘宝から離れたベテラン勢の仕事＝報酬対価については皆さんが代行受託をすることで皆さんの仕事量と報酬は増えています。

ひとりあたり毎号40万円以上を受領しているそうですね。

さらに経費精算枠もあるでしょうし、映画秘宝編集部員の肩書きを上手にを使ってフリーランスとして映画会社からの別の仕事も受託されているでしょうから、それなりに所得は増えていますよね。

それは労働者としては当然の権利ですが、追い出したベテランたちを凌ぐだけの力量で果たしてページを作りきれているのかどうか？ 以後の部数がじりじりと下がってきている…というシビアな現実を編集部はどのように責任がとれるのでしょうか？ 逃げてオシマイ？

ページされたベテランを越える「読者にとって魅力ある執筆陣」を獲得する努力はされたのでしょうか？

映画秘宝の魅力に惹かれる読者が納得する代わりの人材を用意してこそその世代交代作戦だと思うんですね。

2) 迷惑料ひとり25万円の要求? DM被害者の件も片付いてないのに…

見事にベテラン勢をパージした皆さんはオフィス秘宝にひとりあたり25万円の迷惑料の支払いを要求されていますね。合計125万円。

これどうなんでしょうか?

皆さんは「謝罪しようとしないうオフィス秘宝と双葉社」への抗議として降板宣言をされていますが、その実、DM被害者への補償よりも自分らの迷惑料の受領の方が優先されているという事実。

これはあれですね、『ダイハード』の西ドイツ民族解放戦線(ハンス・グルーバー)ってやつ。

政治思想による活動家として逮捕されたテロリストの解放を要求しているふりをしているけど、実は高額有価証券強盗でしかない。(DM被害者をなぞらえてはいません。念のため)

結果、現場の入稿を止められても困ると判断した田野辺さんは、ひとりあたり5万円を支払ったと。

まあ、ナカトミプラザを爆破されなくて良かった。じゃなくて。

3) 商標権「映画秘宝」の委譲をオフィス秘宝に要求

これが一番、頭を抱えた事件でした。

オフィス秘宝が保有する登録商標「映画秘宝」を自分らの所有に移管しろというリクエスト。

皆さんが「映画秘宝」という小国を掌握するためのロード・オブ・ザ・リング? 人質? 保険?

例えば皆さんが新しい法人を設立してそこがオフィス秘宝にとって代わるのであれば、そうした交渉もあるでしょうが、そういう覚悟や責任もとらない五人のフリーランサーがどうやって商標を活かすことができるのか? 岡本編集長が代表して委譲を受けるのか、或いは五人が連名で保有されるのか。

個人が連名での保有は認められますが、先々、皆さんがさまざまな責任のトラブルで仲間割れされた時には伝統ある「映画秘宝」の商標は塩漬けになりかねません。

(このような皆さんの主張への対抗策として『特撮秘宝』の商標は防衛措置をとりました)

なによりタカハシがドン引きしたのは、長らく出版業界にいる皆さんがちっとも雑誌流通のしくみを知らないんだ…ということでした。

商標よりも重要なのは「雑誌コード」の取次への登録なんです。

かつて洋泉社としてトーハン(雑誌コード管理センター事務代行)に登録していたコードは休刊によって廃棄され、いまは刊行元の双葉社の保有によるコードで流通しています。

皆さんが映画秘宝の商標を取得して自らが雑誌形態で刊行を決めたとしても、先行する刊行元の双葉社がコードを廃棄してくれない限り、取次は新規のコード発行や流通委託を受けません。

取次は版元との関係を大切にしますし、旧版の店頭在庫の回収や返品を負う双葉社の了解なくして、新版の書店への配本は行いません。皆さんはコミケで売るか街頭で売るしかないんです。

(まあ、ビッグイシューのような路上販売方式もあるかもしれませんが…)

こういう仕組みがあるので、日本の雑誌のすべてが商標を取得しているわけではありません。

まあ、大手から中堅の版元のビッグタイトルは「輩」に突っ込まれるのを防ぐ意味もあって登録していますけどね。なんか中途半端な知識で商標権を云々言ってる「輩」感が強いと感じました。

4) 刊行元の双葉社をないがしろにし過ぎ。

先の「謝罪文のパワハラ事件」も、その他のすべての事象においても皆さんとオフィス秘宝、その他の関係者の最大の失敗、それは「刊行元を軽視した軽率な行動」です。

真夜中から明け方まで協議してへとへとになっての謝罪文発表云々とか、正直、あり得ません。

その朝にどうにかまとめた協議内容・ドラフトを双葉社に送って、それを双葉社側で法務部・顧問弁護士が点検してから公表するか否かのジャッジを求めるべきでした。

自分たちの中だけで「大変だ、どうしよう」とパニックになり、「これが一番の方法だ」と決め込んで、その行動の土台において社会性を欠いています。

本件、DM被害者事件に限らず、映画秘宝誌が誰かに対して名誉毀損、人権侵害などの記事を書いたり、ネットで発言したことで炎上したとして、それが法的係争に進んだ場合、その被告は刊行元の双葉社が被告となる可能性が大きいのです。

次には請負元のオフィス秘宝社であり、そこから拝命した編集長ですね。

訴える側はフリーライターひとりを相手にするよりも、その記事の掲載管理責任者として編集人や代表者を相手にした方が、より大きな勝利のトロフィーを得られるからです。

弁護士も個人狙いよりも組織を狙った方がより大きな弁償金、謝罪金が取れると思いますよね。

幸いにして今回のDM被害者の方は常識的な方で良かったです。

そのようなリスクを背負ってくれている版元への相談、報告があまりに少なくないですか？

前述のログ化問題についても、双葉社にすればドン引きですよ。

タカハシは「双葉社との刊行引受・請負契約は2年間」と知った夏の時点で、来年、2022年の刊行継続はないわと思いました。まともな経営者なら、こんな危ない編集部とはつき合いませんよ。

それはDM被害者の件ではなく、それを引き金にしてログ化している皆さんの件が大きなリスクマターとなっているからです。

そもそも縮小を続ける出版界で雑誌を刊行するリスクを皆さんは考えられていますか？

2000年頃、日本には1万2000店を下回る書店がありましたが、2020年には8000店となっています。二十年で1/3の書店が閉店しているのです。

書籍はアマゾンなどのオンライン書店が支え、雑誌はWebメディアへ移行しています。

そんな中でこれからの映画秘宝誌がどのような展開でサバイバルを狙うのか皆さんは真剣にお考えですか…？

版元にとって雑誌を刊行するメリットとはなんであるか、皆さん、お分かりですか？

- 1) 雑誌そのものが売れること（映画秘宝だったら実売3万部以上がひとつの到達目標です）、
- 2) 広告が入ること（まあ、今の時代、ないですよ。Web連動でないと広告も難しいかと）
- 3) 雑誌連載や寄稿者からの書籍が得られること（マンガ誌、小説誌は単行本で回収していますね）

さて映画秘宝誌では、1) 2) はすぐには無理として、3) は可能性があったんじゃないですか？

町山智浩、高橋ヨシキ、その他、映画エッセイ本などで二次出版化が期待できるからこそ、双葉社は映画秘宝誌の刊行を引き受けたとタカハシは推測します。

逆に双葉社の立場から考えれば、映画秘宝誌との関係が無くなれば皆さんがパージした単行本売上げが期待できる映画の語り手の本が出せる…とも深読みできます。

■誰が『映画秘宝』の未来を絶ってしまったのか…。救済は…？

双葉社の判断「刊行契約の断念」については、

直接的には、岩田元編集長・元オフィス秘宝代表がやらかしたことと思われます。

間接的には、部数の低迷があり、オフィス秘宝（田野辺代表）のコントロール不足があります。

そしてとどめを刺したのは、皆さんのログ行為の数々であるとタカハシは指弾します。

皆さんが暴れなければ、魅力あるコンテンツメーカーをパージしなければ或いは代替となるコンテンツメーカーを用意できれば、双葉社はもう2年間の刊行継続をしてくれたかもしれません。

皆さんのひとりよがりの悲壮感あふれる降板宣言、それは自己保身と我欲でしかありません。

もう少し関係者の立場を慮るきもちがあったら事態は少しは良くなったかもしれません。

中南米やアフリカの小国で警備を依頼した傭兵部隊が国家転覆を計り、それが適わぬと知るや王宮を爆破して逃亡…という映画がなかったですか？ 『戦争の犬たち』は違うか。

商標も手に入らない、金もそんなにせしめられない、かといって乗っ取るのはリスクもある。

まもなく双葉社での刊行が終われば、この時代、他での復刊は難しいだろう。

となればいまのうちに「DM被害者への謝罪」を理由に降板してしまった方がいい。

雑誌を潰した編集長、編集者と云うダメ編集者の不名誉なラベルだけは張られたくない…。

なんと浅はかな…。

■タカハシが参戦した理由 ホワイトナイト登場

この状況下で、なぜわざわざ火中の栗を拾いに行くのか…？

第七代目映画秘宝編集長就任の Facebook の投稿を読んで、こうした質問もありました。

理由？ カッコいいから。

休刊を知らされ編集降板を誰かのせいにしてスタコラ逃げ出した第六代編集長と、それを敢えて

拾い、田野辺さんたったひとりになってしまったオフィス秘宝を助けに来た第七代編集長。
どっちがカッコいいですか？

皆さんの行動は保身と我欲に支配されていますが、タカハシの行動は献身と無欲そして義勇で動いています。老獺なためき爺イはね、勝てる喧嘩しかしないんです。(喧嘩じゃないけど)

義を見て為さざるは、勇無き也。

私が集めている応援スタッフは、義勇の徒となります。

もちろん皆さんが手放した映画秘宝の残り3号分については彼らも皆さんと同様に報酬対価を受け取る外人部隊です。まずは3号だけの。

もうまく行かなかったとしても、それは引継ぎも後継者の設置もせずに降板した皆さんの残したダメージが大きかった…残念だったね…ということになります。

双葉社での刊行の後、新しい支援者の獲得がうまく行けば再々創刊も希望はあります。

もしダメでも、降板したチームのダメージが大きかった…ということでこちらがチカラ足らずであったことは情状酌量と許されると思います。

義勇の旗印をもつタスクフォース、ホワイトナイツには大義名分があり、なんらイメージリスクはないんですね。対して、皆さんは本状にまとめた「業界人」「読者」「野次馬」が知らないログ行為というネガティブイメージ、ダークアクションを行ったという事実があります。

もし双葉社との刊行契約が全うできなかったり、取次・書店に送本できない事態になったら事情説明のためにここにまとめたことが業界に配布されちゃうかもしれない。

雑誌協会、その他には、皆さんのお名前もタカハシの名前も広まると思います。ビバ！有名人！

もちろん残り3号が出なかったり、双葉社が今回の不始末についてのペナルティを科してきた場合は経済的にもキツイことになります。

資金繰りに窮したオフィス秘宝は義勇軍にも、前任の外人部隊にも対価報酬が出せなくなるかもしれません。いよいよ会社整理ということになれば、皆さんが貰ってない過去の対価報酬、我々が貰ってないこれからの対価報酬も合算して未払い分の精算に入ります。

そんな損なことにならないように、とにかく建設的、創作的に未来ある行動をしなければと思います。

■皆さんへのタカハシからの提示

さて淡々と事実の確認をすませたところで、タカハシからの提案です。

もし皆さんが自分らの軽挙妄動を反省し、或いは誤解を解くべく釈明した上で、より建設的な前進を臨まれるのであれば、なんからの策を講じることは可能と思われます。以下の提案を御検討ください。

A ■ オフィス秘宝、双葉社に突然の降板についてちゃんと謝罪しましょう。

ちっとも謝罪しないとオフィス秘宝と双葉社を非難している皆さんですが、その不意打ちはダメ。

結局、いきなりDMしたり電凸した岩田さんと皆さんとの差ってありますか？

突然の降板を謝るのは皆さんがこれから営業したい先ではなくて、過去に一番面倒を見て貰った双葉社とオフィス秘宝だと思います。こういう小狡い謝罪のふりをした風説の流布はよくない。

謝罪しないことを非難している皆さんもまた、謝罪してないという。

B ■ 各方面にも皆さんのやらかした誤報を少しずつ修正していきましょう。

勘違いやネットでの非難批判に対してナーバスになってしまって、事実と異なる説明をしてしまいましたという感じでゆるやかに修正して行きましょう。

執筆陣の中には「皆さんが編集を降板するのなら、自分も書かない」という方もいらっしゃると思います。それはやむなきことかと思えます。降板した執筆者と皆さんとの信頼関係もあるでしょうし、皆さんとオフィス秘宝両方の言い分を聞きに行く手間も機会もなければやむないことかと。

逆に今回の七代目編集長就任の私的発表で、執筆・イラストやらせて～という方からも、なにか手伝うよ…という方からも、応援メッセージが寄せられています。

まったく本意ではありませんが、映画秘宝の執筆陣の入れ替えもやむなしですね。

ひとつだけ気になるのは、その方たちが映画秘宝とのつきあいを絶たれて後、今回の顛末を知った時に皆さんへの信頼が喪失することだけは回避しましょう。

「君らの決死の覚悟に同調したけど、ウラではいろいろあったのね。もう信用できないな」とならないように。

C ■ 新しい体制で、タカハシと仕事しませんか？

冒頭でも表明したように、タカハシは皆さんに同情的です。

皆さんからすると、突如としてうるさがたの爺さんが現れて、いろいろと調整し始めた。

ウザい！と思われているかもしれませんが、タカハシには皆さんへの敵意はありません。

どこにも逃げ道を作らせない理詰めの論法は皆さんに脅威と思われるかも知れませんが。

これだけ長々と書いてきたのは、ここが落としどころです。

(なんと、1万5000文字も書きちゃった。一文字10円として、15万円だよ)

- ・映画秘宝の再創刊本誌 (実現の可能性は、薄くなりつつありますが…)
- ・Webデジタル版編集 (こちらの方が、可能性は持続できてるかも…)
- ・別冊映画秘宝または類書 (元々、これをやりたかったので…)
- ・その他の業務 (契約、派遣、フリーなど職務形態は都度相談)

「もう他が決まってるから結構です！」

「町山智浩の先輩のタカハシとはやりたくない！」

ということだったら、他の編集部を紹介してもいいですよ。

なぜ、そんなに親切なことを…。信じられない。と思われるかもしれませんが、それがタカハシのやり方です。だって、カッコいいでしょ。

皆さんのやらかした逃亡の仕方は、決してカッコいいものではないですが、上記のシビアな指摘をすなおに受け止め、反省の上で、再度ちゃんと仕事をしようということなら相談に乗れますよ。

とりあえず、そんな感じ。

(タカハシ@早稲田)

追伸 (2022 年 1 月 4 日付加)

このメール本文は、2021 年 12 月 4 日に作成しました。

すぐさま皆さんに出さなかったのは、旧編集部の最後の仕事(2月号入稿/12月21日売)の完了を待ち、また、その後の皆さんのログ化活動の気配を待っていたのです。まあ、読みようによっては皆さんの道義を外した行動への厳しいお叱りにも読めるので…。(叱ってませんよ、念のため)

皆さんが黙って次の道に進むのであれば、そのまま沈黙のうちに終わらせても…とも考えました。

改めて「やっぱり出そう！」と思いメールを差し上げたのは、小沢さんが「特撮秘宝」の商標登録について気がつかれたこと、どうやらその成り行きを快くは思っていないようだ…と、分かったからです。

以下、整理して状況説明しますね。

1) 商標登録「特撮秘宝」は、私の会社：トランスメディア株式会社が先願権を有しています。

2) 実際に使用したのは原初的には洋泉社ですが既に解散したため提訴はできません。

3) 映画秘宝復刊の時に宝島社との協議により合同会社オフィス秘宝が継続出版権を保有しました。

4) 現時点で私の出願についてクレームできるのはオフィス秘宝社だけと思われます。

(書体のデザイナー氏が、自作と類似した書体だと主張されるのであれば書体を変えます)

5) 小沢氏は洋泉社の社員時代に法人帰属の職務著作業務として創刊に関与されましたが無権利です。

(これは御本人も認識されていて、映画秘宝編集部を離れたから2度と参加できない旨、発言)

6) 本件の申請はタカハシの独断で行ったものでオフィス秘宝との協調行動ではありません。

(オフィス秘宝からクレームがくれば協議して返上する可能性もあります)

(オフィス秘宝が渋々認めてクレームを出さずにタカハシが保有する可能性もあります)

7) もしタカハシが取得すれば、パートナーと共に再創刊の可能性もあります。

(パートナーとしては、オフィス秘宝社、小沢涼子氏、その他の第三者などが想定できます) という流れです。

12月1日の皆さんのとってもペシミスティックでナルシスティックな離脱宣言を受け、タカハシはこちらの行動すなわち新しいスポンサー、パートナー探しに対して、それを阻害しかねない危険行為と認識しました。そこでふたつの行動を取りました。

ひとつはFacebookでの「新編集長就任宣言」、もうひとつは翌日の「特撮秘宝」の商標出願です。

皆さんが特撮秘宝を持ち逃げする可能性よりも、第三者が混乱に乗じて申請する可能性も想定して、どこからも横取りされないように守った…とも言えます。また小沢さんを編集長にして新しいパートナーと再創刊できる可能性も考えてのことだとも言えます。

ここでひとつ深く感じて頂きたいのは、皆さんは自らが創刊した雑誌（それは自分の子どもにも等しいとタカハシは考えます）を置き去りにして、合同会社オフィス秘宝という家から出奔したのだ…という現実です。いわばネグレット（育児放棄）にも等しい行為です。

もうね特撮秘宝という愛児とは二度と会えないかも…。

悪い連中にさらわれてダメなオトナになっちゃうかも…。

その家の家父長がやらかして離婚となった家、それでも残された家族は頑張ってこども達を守っていくべきなのに、まずは家の形成に深く関与した親戚のおじさんたちを非難して絶縁し、さらに家業の経営不振を知ってつきあい先に向かって破壊的な家との絶縁宣言をして出奔。

そこへ姿を現した見知らぬ一団。業界ゴロなのか、正義の味方なのか…。

そんなぐだぐだなホームドラマを想起しました。

或いは…。

自分が創刊した雑誌なのに、その痕跡（例えば、Special thanks to などの名誉クレジット）すら残してもらえない、せめて「諸般の事情でクレジットから外すけど…」という事前通告もなく…。

代わりに編集制作の請元代表であり唯一の経営者を、Special thanks クレジットに無断で追いやる。オフィス秘宝代表社員なり、ゼネラルプロデューサーなり順当な役職があると思います。

こういう失礼なことをやっていた皆さんも、いざ、自分らが同じような立場になったら「悔しさ」が分かりになると思います。

皆さんはSNSという虚ろな疑似社会システム（マトリックス？）を随分頼りにされているように感じます。確かに便利な、軽挙妄動する輩を乗せるには好都合なシステムかもしれませんが、それは常に両刃の剣だとタカハシは思います。

今回の特撮秘宝の商標先願について小沢さんが気がつかれた…のは、どうしてでしょうか？

- 1) もう自分は関係ない…と宣言していても未練があったから取得を考えて調べたら発見した。
- 2) 自分はこだわってなかったが、取得できるかも…と耳打ちした知り合いが教えてくれた。
- 3) 初夢のご託宣または初詣のおみくじで「商標を調べよ」というお告げがあった。

自分から一度は見捨てた子どもでも気になって影から見ていた…というあたりが正解でしょうか。

ここでは子どもに例えましたが、実のところ、それは人格ではなく名前に過ぎません。

別の名前でもっと優れた子どもを作り出すことも、その名前と実体を尊重して家に戻るなり、別の家で育てることも出来るのです。

タカハシは、特撮秘宝を自らやるつもりはなく、誰か…と、例えば小沢編集長とのセットアップが最良の選択肢ではないかと思っていることを最後に表明して一旦、筆を置きます。

(2022 年 1 月 5 日)